第Ⅳ部門　　「ホームレス問題」の構造に関する基礎的研究

近畿大学大学院総合理工学研究科　学生員○勝本　竜
近畿大学理工学部　正会員　久　隆浩

1．はじめに

近年、全国各地においてホームレスが増大し、それに対応して支援活動も行われているが、深刻な社会問題となっている。各団体間相互や行政機関との連絡調整、調査・研究広報・啓発活動などを行い、対策としては前進しているが、「ホームレス問題」の何が問題になっているのか、という視点については不明確な状態のままである。

2．研究目的と方法

本研究は、都市空間における「ホームレス問題」の構造を考察することを意図した研究の一つである。調査方法として、まずメディアの中でホームレスがどのように表現されているのかを調査する。また、公共空間を占有しているホームレスを対象としたフィールド調査を行い、ホームレスの生活実態を明確にする。そしてそれらを比較し分析することにより、都市空間における「ホームレス問題」がどのように構築されているのかを明らかにし、最後にホームレス問題に対する対応策を考察する。

3．調査概要

本研究でとりあげる「ホームレス」とは、“特定の住居を持たずに、公共の場で寝泊りするなどして日常の生活を送っている人”と定義する。調査対象としてメディアによる調査では、インターネット上で「ホームレス問題」をキーワードとして検索された545件とする。またフィールド調査では、大阪城公園で寝泊まりしているホームレス114人（2001年度現在）とする。

4．メディアでの「ホームレス問題」の捉えられ方

4－1「ホームレス問題」の類型

溝端・平山の研究[1]では、表3－1のA~Eのように分類されている。そこでのホームレスの捉えられ方は「逸脱者」とされ、日常の外の見えない領域に置かれ、一般社会から隠蔽されていた野宿者が、人数の増加により「問題」として可視化し「認知の対象」となり、さらに「支援の対象」になってきたとされている。次にインターネットに掲載されている記事を検索した結果、既存研究で導き出されたカテゴリーA~Eに加えF~Oのカテゴリーがあることがわかった。

インターネットによるホームレスの記述内容より、ホームレスの捉えられ方が、多様化していることがわかる。ホームレスが悪影響を与えるものとして取り上げられている問題は「逸脱者」・「不安材料」・「排除の対象」で全体の2割であり、ホームレス問題として取り上げられている多くは、今日の社会構造がホームレスに不具合をもたらしていることを問題としている。

社会の姿勢は、ホームレスを認知すべきものとしていた状態から、対策を打つ段階に移行した。しかし、「支援の対象」としてホームレス対策がなされてきたが、ホームレスは増加している。結果が伴わない「対策が問題」という形で捉えられていることがわかった。

表4－1　カテゴリー

A.	調査の対象となる[認知の対象]
B.	自立支援対策やボランティア活動の[支援の対象]
C.	社会の外部に位置付けられる[逸脱者]
D.	殺人・傷害事件などの[被害者]
E.	立ち退かせ対策への抵抗やリサイクルなどの[生存術]を模索する能力に長けているもの
F.	その特殊性から[表現の素材]となるもの
G.	社会内部の人々から自由さへの[憧憬]
H.	ホームレスへの[対策が問題]
I.	社会問題の[一例]
J.	トラブルの原因となるなど住民の[不安材料]となるもの
K.	住居がない者、失業した者など、生活する[条件が欠損]しているもの
L.	人間としての権利の[剥奪対象]
M.	社会から[誤解]を受けた存在
N.	公共空間からの[排除の対象]
O.	市民も抱える[問題の対象]

4－2　「ホームレス問題」の構造

この「ホームレス問題」をそれぞれのカテゴリーの関連性に注目し分析してみると、ホームレス問題が生じる構造が捉えられた（図4－2）。

ホームレスが「条件が欠損」・「逸脱者」などの6つの問題を抱える存在であることがわかる。そのうち、

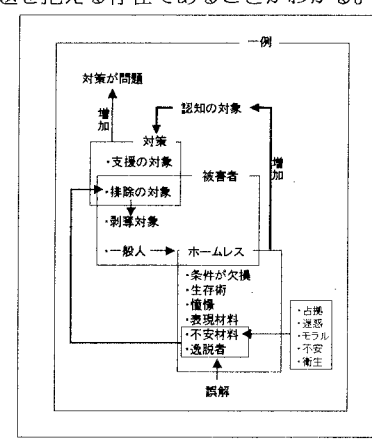

図4-2　ホームレス問題の関連性

Ryo KATSUMOTO, Takahiro HISA

「不安材料」「逸脱者」という視点が「誤解」であり、問題を引き起こす原因となっている。また、その視点より対策としての「排除の対象」となり、それを「剥奪対象」となる流れと、普通の生活からホームレスに至る行程を、「被害者」という形で問題とされる。そのホームレスが増加することにより、「認知の対象」を経て「支援の対象」などの対策が成される。しかし、ホームレスは減少せず、効果が表れないため「対策が問題」とされる。この一連の流れが一般化し、社会問題の「一例」として『ホームレス問題』が取り上げられていることがわかった。

5．ホームレス生活の現状

5－1　大阪城公園のホームレスの生活スタイル

本項では、大阪城公園のホームレスを対象に、性別、年齢、居住年数、就労、食生活、前職業、居住の7つの項目について調査した。杉友・後藤らの研究[2)]では、「ヤマ」と呼ばれる日雇い労働市場が近くにある都立戸山公園のホームレスを対象にした調査から、生活スタイルを就労形態の違いによって A～F のように分類している。

大阪城公園の調査結果では、杉友・後藤らの研究[2)]と類似してみられたA～F以外に、今後の生活をあきらめず、職安にて就職活動をしている人達Gがみられた（表5－1）。

表5－1　ホームレスの類型

A：「ベテラン型」野宿生活年数も長く、定職に着いていないその日暮らしが基本である人。
B：「ヤマ余裕型」寄せ場で仕事をもらい、比較的働く機会に恵まれている人。
C：「ヤマ困窮型」寄せ場で仕事をもらっているが、週に2・3日働ければいい人。
D：「隠遁型」特に仕事が無く将来は年金で生活しようとしている人。
E：「他人依存型」他人の収益に頼るひと。
F：「新入り方」新しく公園暮らし始め、寄せ場とはまったく関係の無い仕事をしている人。
G：「腰掛型」就労せず、野宿生活が1年未満の人。

大阪城公園におけるホームレスは、完全失業率の上昇と共に増加し、その9割以上が男性であり高齢である。時々の経済政策の誘導により導き出された人たちである。また、ほとんどのホームレスは、廃品回収などによる現金収入を得て、自炊生活を送っている。

失業し、野宿生活を余儀なくされた人が、職業安定所に職を求め、公園を仮の生活の場とする。その生活には多様な状態があり変化する。野宿生活からの脱出がない限り、行き着く先は「ベテラン型」「他者依存型」である。野宿生活を生き抜くためにホームレス同士のコミュニケーションがあり、お互いを支え合っている。生きることを諦めることなく、一般に普通とされる自立した生活をしている。しかし、職を得ることなく野宿生活からの脱出不可能という結果が、大阪城公園に住むホームレスの現状といえる。

「ヤマ困窮型」に属する人々は少ないが仕事が無い時は廃品回収をしている。「ベテラン型」の多くは仕事を探していたが、仕事に付くことが無く、廃品回収が主になり、「ヤマ困窮型」の派生型といえる。「隠遁型」は自炊し、他人に頼る人は無く自立した生活といえる。「新入り型」の半分は廃品回収をしており、「ベテラン型」と何ら変わりの無い生活をしている。また、この分類では各グループに属すが、居住形態・食事形式から見ると「テントを張らない」人が明らかに1つのグループとして見て取れる。このホームレスは居住地を定着させず、計画性の無い生活をしていることが多い。

日雇い労働市場から強く影響を受けており、「ヤマ余裕型」「ヤマ困窮型」「他者依存型」が特有のホームレスである戸山公園と大阪城公園の違いが分かる。これは、ホームレスを取り巻く環境の違いによるものであり、それぞれの生活スタイルには特徴があり、その生活スタイルには多様性があることに気付く。

5．考察のまとめ

5－1　「ホームレス問題」の構築

ホームレスの認識が問題の起点となり、ホームレス生活の枠外でも問題がおこり、問題が問題を生み、今日の社会で「ホームレス問題」として捉えられる。少数の人が一部のホームレスを「逸脱者」などと捉え、その認識を全てのホームレスに当てはめ対策が行われている嫌いがある。その社会の動きが多くの人に「ホームレス問題」として感じられている。ホームレスでない人がホームレスを見る視線の置き方、認識不足など意識的な錯覚により「ホームレス問題」が構築されていると考えられる。

5－2　今後の課題

ホームレスの認識の錯覚がなぜ起きているのか、という視点まで掘り下げ「ホームレス問題」の解決に導いていく必要がある。また、ホームレス対策も必要であるが、ホームレスに対し一方向ではなく、双方向のコミュニケーションが必要であり、その為の具体的な対策を考えていく必要がある。

参考文献

1）溝端倫子・平山洋介　「構築される野宿者」　平成13年度日本建築学会近畿支部研究報告集　2001年

2）杉友ジョージ・後藤春彦　「ホームレスによる公園占用の実態とそのメカニズムに関する研究」　日本建築学会計画系論文集、第517号　1999年

3）総務庁統計局統計センターhttp://www.stat.go.jp/　2001年

4）日本労働研究機構　http://www.jil.go.jp/　2001年

5）野宿者人権資料センターhttp://member.nifty.ne.jp/nojuku/　2001年